

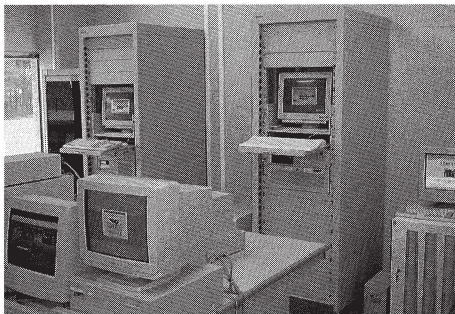


インターネットと図書館、そして博物館

「インターネットと図書館」というと、どんなものを思い浮かべるだろうか。数年前、あるコンピュータ・メーカーのテレビCMでこんなシーンがあった。田舎道を歩く老人が孫娘に嬉しそうにこう語る。「インターネットでインディアナ大学の蔵書を利用して博士論文を仕上げたよ」。日本でも、学术论文の全文を検索できるシステムが大学を中心に開発されているし、有名なところでは『青空文庫』や米国の『ゲーテンベルグ・プロジェクト』というような、著作権の保護期間が過ぎた古典文学などの全文テキストを無料でダウンロードしたり閲覧できるサービスもある。

1945年、米国の科学者ブッシュは『アトランティック・マンスリー』という雑誌に、Memexという空想上のシステムについての論文を書いた。それは機械化された個人用図書館ともいえるべきもので、個人がすべての記録類を蓄積し、速く柔軟にこれを検索することができる。この装置にはスクリーンがあってそこに資料が映し出されるが、必要な情報は何時でも何処からでも参照でき、ある情報から関連する情報へとさらに進んでいくこともできる。それは科学者としての自分の理想的な研究空間を描いたものだろう。『As We May Think (人の思考のように)』と論文のタイトルにあるように、私たちがまさに頭の中で記憶を辿るように、記録された知識を自由に検索できるシステムを想像した。このシステムは、現在のインターネットやハイパーテキスト概念の原型とされている。以前は夢物語だったものが、現実には近づきつつあるのが昨今の状況だろう。

こうした様々な電子図書館が既存の図書館に置き換わる、という考え方が一方にあるが、それに対して反発的な意見を目にすることもある。しかし、これから先はともかく、過去に生産されたすべての文字情報がデジタル化されることは殆ど不可能に近く、それだけでも、図書館が電子図書館に完全に置き換えることが現実的ではないことは理解できるだろう。さらに、図書館には、コレクションの集積以外に、文献や情報を自由に利用できる空間やその機会の提供、という一種シンボリックな役割があり、それとも忘れることはできない。



奈良国立博物館のコンピュータ室

それでは博物館はどうであろう。電子博物館、デジタルミュージアムといった言葉が耳にする機会も増えてきた。博物館にはデジタル化という言葉がすんなり馴染まない、と感じられる方もいるだろう。図書館がデジタル化に親和性があるのは、主に文字情報を扱っているということと、それが本来複製可能な情報であるという点に他ならない。それに比べると、博物館では、唯一かけがえのないものを扱っている点が決定的に異なる。そこで、博物館でのデジタル化は、図書館とは別の視点で様々なアプローチをとる可能性がある。しばらく前になるが、東京大学総合研究博物館では銅鐸の音を再現し、その音をインターネット上で聞けるようにして話題になった。他にも動画や音声を使って工夫をこらしたものなどいくつも見られる。しかし、最も一般的なのは、作品や展覧会に興味をもち、実際に足を運んでいただくための入り口

となるもので、多くの博物館や美術館がホームページで収蔵品や展覧会の情報を提供している。こうしたものは、博物館のデジタル化というより、機能の一部を補完するものといえるだろう。インターネットで公開している収蔵品情報に関しては、1996年から文化庁が「共通索引システム」の公開をはじめ、各館を横断的に検索出来るシステムの構築を進めている。文化財や美術品の所在や基本的な情報を誰もが簡単に入手できる状況が整いつつある。これも博物館とインターネットの関係を探る試みの一つといえるだろう。

さて、奈良国立博物館でも、1996年にホームページを開設して以来、その内容の充実にも努めてきた。展覧会予定と概要をお知らせするのももちろんのこと、名品162件を画像と解説付きで紹介している。また、所蔵する写真フィルムの情報をデータベースに蓄積して提供することも順次おこなっている。このデータベースは画像が限られているもののインターネットを通して利用でき、最近、画面構成も見やすいものに変更した。作品の精細な画像や文字情報はもちろん、貴重な資料や、図録や紀要などに掲載される新しい研究成果、また、文化財に親しんでいただくために工夫をこらした子供向けの情報など、インターネットを通して公開し、利用していただきたいと考えている情報はまだまだたくさんある。



博物館の展示室で、独特の空気に包まれながら作品に直面し、そして心地よい疲れを感じながら休憩用の椅子に腰掛けて、いま見てきた作品の記憶を反芻する、といった体験は、博物館に訪れる人、ひとりひとりのものとしてこれからは残るだろう。それは仮想的な空間で得られるものとは異なり、簡単に何かに代替されるものではない。しかし同時に、出来るだけ美しい画像と、可能な限りの文字情報を提供して、インターネットの利用者と博物館の観覧者を繋いでいくことも、今後の博物館の重要な使命ではないだろうか。博物館でも、未来のあるべき姿を描くならば、いつかそれが現実

に近づくものと願いつつ、あゆみを進めていきたい。



ホームページ